第四四十回　青葉会　令和四年十二月八日（木）（於：三軒茶屋しゃれなあど会議室）

選　　者　川口孤舟

出席者　今井紀久男　柿崎忠彦　川口孤舟　久米五郎太　後藤とみ子　在間千恵
佐藤忠重（ただしげ）　豊田穣（ゆたか）　西澤國護　星田啓子
山田啓子（けい子）

投句・選句　伊賀山そらお　熊谷國男（くにお）　小早健介　朱牟田静雄（恵洲）　高橋康敏
土谷堂哉　中川雅夫　長谷見敏（びん）　福島正明　古田昇　宮内規雄
山崎亜也　山内天牛　渡邊盛雄
重枝孝岳　庄司龍平　高橋清子　橋口隆　早川允章　山本三恵
大滝長孝（家伝亭長太楼⬇花）

選句のみ

《互選句》○は選者の特選　◎は孤舟選者の選

十一点　大蕪の切るをためらふ白さかな　けい子（紀・く・五・○と・孝・清・堂・雅・昇・啓・亜）

九点　底冷えや花魁走る舞台裏　啓子（紀・く・た・○恵・康・○隆・け・亜・三）

八点　冬夕焼見付かるようにかくれんぼ　孤舟（紀・五・と・○健・孝・堂・允・び）
◎妻を看つ妻に看られつ冬に入る　堂哉（○そ・紀・忠・孤・恵・び・三・○盛）

七点　膝立てて鮟鱇鍋を取り仕切る　孤舟（紀・國・隆・規・け・亜・三）
鯱は城の語部冬青空　仝（紀・く・と・千・康・ゆ・び）
◎菊一輪活けて無聊を慰めり　ゆたか（紀・孤・花・孝・清・國・盛）

六点　凍空に鳶一羽浮き大廻り　五郎太（紀・忠・龍・清・雅・三）
夢潰えしもののふの墓石蕗咲けり　くにお（紀・健・孝・康・昇・盛）
和ろうそくの踊る火自在冬ぬくし　千恵（紀・花・た・雅・び・啓）
◎手で紙に書くが手紙や冬灯し　恵洲（紀・孤・健・○龍・び・○三）
◎新蕎麦や先ずは徳利の酒一合　ゆたか（紀・忠・孤・た・國・允）

五点　歯の抜けた孫の笑顔やクリスマス　忠彦（紀・ゆ・隆・け・天）
耳遠くなりし同士の忘年会　仝（紀・龍・ゆ・規・天）
◎黄葉落葉蹴散らし通るランドセル　とみ子（そ・紀・孤・○た・花）
暮れてなほ釘を打つ音枇杷の花　康敏（紀・と・恵・啓・び）
◎話し合ふ余地なき戦火冬ざるる　堂哉（紀・孤・千・ゆ・び）
シュッと鳴る帯する音や冬の朝　啓子（紀・た・清・允・天）
家具までも暖とる火となりウクライナ　仝（紀・忠・堂・隆・昇）

四点　◎坊さんが自転車に乗る師走かな　忠彦（そ・孤・隆・規）
富山より風花に乗り薬売り　孤舟（紀・五・恵・天）
義士の日や畳の冷ゆる武者隠し　くにお（そ・忠・五・○啓）

映画館そっと手渡す咳の飴　とみ子　（紀・堂・昇・亜）
◎奥多摩の江戸の古民家冬うらら　ゆたか　（紀・孤・國・規）
歌舞伎終え喧騒の町冬の月　けい子　（そ・紀・く・允）
この大地宇宙の塵か冬満月　盛雄　（紀・健・ゆ・雅）

三点

◎日の出待ち落葉掃く音門毎に　そらお　（紀・孤・規）
サッカーの興奮鎮める柚子湯かな　忠彦　（紀・〇允・け）
鳴り響く除夜の汽笛や神戸港　とみ子　（紀・花・康）
息深く冬至南瓜を真っ二つ　仝　（紀・五・千）
◎手擦れなきホテルの聖書冬の雨　康敏　（紀・孤・恵）
棒グラフ幾山越さばマスクとる　びん　（紀・千・ゆ）
◎熊出づと言われ鈴ふる木曽路かな　仝　（紀・孤・堂）
八重椿言ひたい事があるようで　正明　（恵・孝・三）
猫の道追ひて奥には花八つ手　けい子　（五・と・千）
つい失くすマフラーそれぞれ日くあり　亜也　（健・啓・三）

二点

顔見世の最後の出番叶はずなり　紀久男　（雅・盛）
（深夜転んで怪我。救急車の世話に）
弟と義弟逝き吾大怪我の厄払ひ　仝　（忠・盛）
鋤焼は家族の丸くなるところ　孤舟　（紀・堂）
穏やかな日々に慣れ行くラ・フランス　五郎太　（紀・く）
停電の凍る戦地にも丸い月　健介　（紀・け）
盛りだくさん築地の昆布屋の大熊手　千恵　（國・け）
日めくりの薄くなりたり師走かな　仝　（清・國）
雨上がり小鳥囀る冬の朝　ただしげ　（そ・紀）
中天に月煌々と冬の空　仝　（龍・允）
百歳を待たずして逝く師走かな　仝　（紀・隆）
失せ物のつひに出（いで）ざる寒さかな　恵洲　（紀・〇規）
聖樹立つコンビニに買ふ中華饅　康敏　（昇・啓）
楽しみつつ句作に勤しみ年暮るる　ゆたか　（康・盛）
サンタさん今も信じる園児達　國護　（紀・と）
戦火なき家族団欒ペチカ燃ゆ　昇　（紀・健）
木枯らしの抜ける林に笛の鳴る　啓子　（た・雅）
三味方（しゃみ方）の掛声冴ゆる河東節　仝　（〇紀・天）
粛々と抜歯の予約冬ざるる　盛雄　（紀・〇昇）
妹が兄を従がえ七五三　けい子　（〇亜・天）
賀状書く準備に先は筆を買ふ　天牛　（千・亜）
極月や孫の肩借りとぼとぼと　仝　（紀・龍）

一点

紅葉のニュースが急かす旅行好き　そらお　（紀）
顔見世やさゝま最中を家苞に　紀久男　（康）
一隅に洋野菜ある冬市場　五郎太　（紀）

中の舞しばし間が延び冬ぬくし　五郎太（紀）
フレンチに後輩誘ふ年の暮　仝（紀）
サッカーにブラボーの声冬日和　とみ子（紀）
弾丸（たま）ならぬ球で手柄の師走かな　健介（三）
冬りんご丸ごと齧る地味横溢　千恵（紀）
暮れ早し京都南座初日開く　ただしげ（紀）
寒椿ひときは映える燃える紅（あか）　國護（紀）
クリスマス捧ぐ讃美歌亡き人へ　仝（紀）
今朝もまた元気もらひし寒卵　規雄（清）
深閑と山茶花赤く咲きて冬　仝（花）
串カツと河豚店並ぶ通天閣　けい子（紀）
日に薄く不満げに見ゆ古暦　亜也（〇孝）
彼や是や浮いては消ゆる冬至の湯　盛雄（紀）

※　※　※　※　※

【句　評】

※が付き一字下げたコメントは、採ってはいないものの、気になる点を記したものです。

十一点句　大蕪の切るをためらふ白さかな　けい子

くにおさん・・包丁を入れることに一瞬躊躇するほどの大蕪の白さ。私も時々厨房に立ち包丁を持つことがある。。作者の気持ちが実感できる。

とみ子さん・・立派な蕪の美しい白さに圧倒されます。きっと美味しいでしょうね。

堂哉さん・・・中七で料理人の暫しの感動、躊躇いが良く伝わります。

亜也さん・・・きめ細かくて、なめらかで、真っ白で…大根とは大違い。

九点句　底冷えや花魁走る舞台裏　啓子

くにおさん・・舞台裏でなければ見られない光景。豪華な衣裳で八文字の独特の足の運びをする花魁から「走る」ということは想像できない。出番間近な花魁役の役者の忙しさが伝わってくる。

恵洲さん・・・華やかな表舞台しか知らない選者の想像力を刺激する句。花魁は揚巻でしょうか。次の出番に備えて衣装を変えたり化粧を直したりしている女形の慌ただしさのスケッチが面白い。熱気あふれる表舞台に対し、舞台裏はしんしんと冷えるのでしょうか。

ただしげさん・助六の並び花魁の舞台裏を面白く捉えている。

康敏さん・・・出番が迫っているのだろうか。寒い舞台裏を走る花魁姿の役者。動作は舞台の上とは違うだろう。ユーモアがある。

隆さん・・・・今の舞台裏も底冷えするのでしょうか。それはさて置き、底冷えの季語の効いた、今年の青葉会の掉尾を飾る句です。

亜也さん・・・昔の歌舞伎座なら如何にもですが、今でも？

紀久男・・・・出番終えた菊之助等が花魁衣裳を脱いで、走って楽屋へ。小生の付き人として楽屋、舞台裏を訪れた啓子さんが見事に詠まれた作品。

啓子さん（自解）・十三代團十郎襲名披露で河東節に今井さんがご出演。その付き人としてお手伝いさせて頂いたお蔭様で歌舞伎座の舞台裏を拝見。役者の皆さま

方のご様子を拝見出来ました。華やかな舞台の裏では集中した姿で次の衣裳のためか、皆小走りです。出番の直前ではじめて花魁も履物を履き、幕の後ろに引っ込んだ瞬間に履物は脱ぎ捨て、裸足！　歌舞伎座舞台裏の天井は緞帳が上に巻かれて出番待ち、畢竟天井も高く大変広いので底冷えがします。昔は殊に床は冷たく寒かったに違いありません。稀有な素晴らしい経験をさせていただきました。揚巻や白玉役をされた菊之助は美しく丁寧な物腰、改めて惚れ惚れ致しました。

八点句

冬夕焼見付かるようにかくれんぼ　孤舟

健介さん・・・お見事、一茶でもこうは上手く詠めなかったでしょう。

とみ子さん・・冬の夕焼は、すぐ暗くなるので、心細いものです。取り残されないように

という気持ちが 伝わってまいりました。

堂哉さん・・・　季語を冬うららなどしたら、特選にしたい句。

びんさん・・・「見つかるやうに」の中句が入って、金子みすずの郷愁のような情感が出

てますね。

私も真似をさせて頂いてひとつ「かくれんぼ見つからぬまま冬日暮る」

◎妻を看つ妻に看られつ冬に入る　堂哉

孤舟さん・・・老々介護の究極。偕老同穴目指しお互い支え合って生きてゆこう。

恵洲さん・・・老々介護でお互いに労り合う毎日。そうこうしてるうちにいつの間にか

今年も暮れるなあ、本当にねえ、と仲睦まじい二人の感懐が感じられる。

盛雄さん・・・もたれ合って〝人〟となる。誰もが通る道。厳しい佳句。

七点句

膝立てて鮟鱇鍋を取り仕切る　孤舟

隆さん・・・・鍋奉行と鮟鱇鍋の取り合わせの妙。鍋奉行の顔が鮟鱇顔に。

「鍋奉行なら任せよや鮟鱇鍋」でも。

亜也さん・・・そもそも品より味の料理にて・・・。

三恵さん・・・普段、台所に立ったこともないのに「鍋」となると必ず一家言持ちだしてい

た亡父を想いだしました。

鯱は城の語部冬青空　孤舟

くにおさん・・城の歴史の一部始終を鯱は知っている。鯱を「城の語部」と捉えたところに

意表を突かれた感じになった。鯱は普通、雌雄一対である。語部はどちら

だろうか。

千恵さん・・・築城の時から屋根のてっぺんから市井の人々を眺めてきた鯱。同時に人々も

昔から鯱を愛でて来た。明治の人達も大のお気に入りだったようです。

正に語り部ですね。

康敏さん・・・この城の鯱は昔のまま健在なのだろう。冬青空が効果的。他の多くの鯱は

落雷や戦火で焼け落ち造り直されている。

参考「石垣は城の語り部新松子」村川与侑子

ゆたかさん・・「城の語部」と見立てたところがいいです。

◎菊一輪活けて無聊を慰めり　ゆたか

孤舟さん・・・茶室の一輪の菊花が不安な心を鎮めてくれる。

盛雄さん・・・これぞ詩人の一句。落ち着きのある日常が伝わってきます。

六点句

夢潰えしもののふの墓石蕗咲けり　　**くにお**

健介さん・・・「石蕗咲けり」　は　「石蕗の花」で良かったのでは・・？

康敏さん・・・夢潰えし武士は大勢いるが、大河ドラマ「鎌倉殿の十三人」の源実朝が思い浮かんだ。日宋貿易を夢見て巨船まで建造したのに…。墓は鎌倉寿福寺にある。

盛雄さん・・・赤穂浪士の墓でしょうか。句会の前日は討ち入りの夜。〝石蕗咲けり〟で決まりました。

和ろうそくの踊る火自在冬ぬくし　　**千恵**

ただしげさん・和ろうそくの炎の動きを面白く捉えていて、楽しい。

◎手で紙に書くが手紙や冬灯し　　**恵洲**

孤舟さん・・・パソコンの活字で用を足すことが多いが、なかなか温もりは伝わらない。

龍平さん・・・良い句ですね。時には事の本来を！　私も今年から賀状の宛先住所氏名は手書きにしました。枚数激減のせいでもありますが。

三恵さん・・・とてもシンプルな単語と表現なのですが、ユニークで、奥が深そうです。

◎新蕎麦や先ずは徳利の酒一合　　**ゆたか**

孤舟さん・・・酒に蕎麦はよく合う。ましてや新蕎麦と新酒なら尚更。

くにおさん・・・新蕎麦を肴に一杯とはどこか通人の趣がある。蕎麦も酒もさぞ美味かったことだろう。秋の一句としていただいた。

ただしげさん・・蕎麦にお酒は切っても切れない関係、新蕎麦なれば先ず一献。

五点句

歯の抜けた孫の笑顔やクリスマス　　**忠彦**

ゆたかさん・・歯の抜けた孫の笑顔は愛嬌がありますね。

隆さん・・・・このころの子供は屈託がない。「サンタさん」という呼び声が聞こえそう。

天牛さん・・・いづれにしても楽しいクリスマスです

耳遠くなりし同士の忘年会　　**忠彦**

ゆたかさん・・私も耳が遠くなった仲間の一人です。

天牛さん・・・隣同士でも全然聞こえない人がいるとつい大声になったりします。

◎黄葉落葉蹴散らし通るランドセル　　**とみ子**

孤舟さん・・・エネルギー溢れる小学生は通学中も悪戯放題。後で大人が掃き片付けるのも知らずに。

ただしげさん・・小学生の通学時のいたずらを上手く捉えていて、下五が面白い。

暮れてなほ釘を打つ音枇杷の花　　**康敏**

恵洲さん・・・可憐な枇杷の花が咲く夕暮れの小庭に佇んでいると、もう薄暗いのに、ご近所で塀の修理か何かやっているトンカチの音がまだ聞こえてくるという、市井の庶民の暮らしの一コマが見えてきて昔懐かしい。

◎話し合ふ余地なき戦火冬ざるる　　**堂哉**

孤舟さん・・・紛争解決は核兵器の使用ではなく、外交努力が必要なのだ。

ゆたかさん・・ウクライナの人々の生活を想うと胸が痛みます。

龍平さん・・・力だけが決着をつけれる！もう何世紀もこれで来たあの人達の歴史…日本もロシアや中国等と陸続きであったらとゾッとする。

シュッと鳴る帯する音や冬の朝　　**啓子**

ただしげさん・朝、着物着る際の粋な感じが楽しい。

天牛さん・・・暫く聴きませんね！

家具までも暖とる火となりウクライナ　　啓子

堂哉さん・・・想像しただけで心身共に寒くなります。中七は　暖とる火とや　では如何でしょう。

隆さん・・・・ウクライナの戦禍の暖は死活問題ですね。ただ「暖とる」は説明調の恐れあり。「家具くべる屋外の焚火ウクライナ」でも。

四点句

◎坊さんが自転車に乗る師走かな　　忠彦

孤舟さん・・・将に師が走る程の忙しさ。車や、バイク、今では自転車まで総動員して。

隆さん・・・・二つの家の改葬を了えた。離檀にはお坊さんも不快感を隠し切れなかった。師走ものんびりできない寺事情か。「坊さんも自転車で急く師走かな」でも。

富山より風花に乗り薬売り　　孤舟

五郎太さん・・「風花に乗り」がいいですね。子供の時は家に救急箱があり、富山から薬屋さんが時たまやってきました。今では富士薬品（？）などが富山で薬を生産し、それを各戸に置く（配置薬と言う）ビジネスが続いているとの話が句会で出ました。

恵洲さん・・・今でも富山の薬売りは巡ってくるのでしょうか？昔の思い出の情景でしょうか？寒い中を鼻の頭を赤くして水洟なんぞ垂らしながら、訪ねてくる富山の薬屋さんの俤が浮かんできます。

天牛さん・・・薬売りが風花に乗って来るってのは面白い‼！

義士の日や畳の冷ゆる武者隠し　　くにお

五郎太さん・・どこのお城でしょうか。討入の日に泉岳寺に行ったことがありますが、若い人も多く、皆さん何本ものお線香を持ち、四十七士のお墓にお参りをしていました。

紀久男・・・季重なりと思うので採りませんでした。

※康敏さん・「冷ゆ」は秋の季語。中七は「畳冷たき」と冬の季語を使うべきでしょう。「義士の日」と季重なりになりますが、武者隠しの冷たい畳で、討ち入りの寒い雪の夜を髣髴とさせ、主季語の「義士の日」が強調されます。

映画館そっと手渡す咳の飴　　とみ子

堂哉さん・・・私は演奏会場でガムをもらったことが、何度かあります

亜也さん・・・コンサートだともっと大変。最近は口蓋に貼りつき、ゆっくり溶けるトローチというのもあり、喋るのも可能なので、会議で便利。

※康敏さん・上五と下五が名詞で、入れ替えて「咳の飴そっと手渡す映画館」としても句が成り立ちます。「観音開き」とか「山本山」「サンドイッチ俳句」と称され、不安定な句・必然性に欠ける句とされるようです。

◎奥多摩の江戸の古民家冬うらら　　ゆたか

孤舟さん・・・江戸時代から伝わる兜造りの旅籠屋ふうの旅館に、冬のおだやかで暖かな日差しが注ぐ。

歌舞伎終え喧騒の町冬の月　　けい子

くにおさん・・芝居が跳ねて外へ出たら町はまだざわついている。空には冬の月が冴え冴えと町を照らしている。師走の歌舞伎座界隈の景が想像できる。この場合、町と街どちらがいいだろうか。

この大地宇宙の塵か冬満月　　盛雄

ゆたかさん・・地球を宇宙の塵とみたところが面白いです。

三点句

◎日の出待ち落葉掃く音門毎に　　そらお

孤舟さん・・・夜の間に散り乱れた路地の落葉を掃く音。お隣も、そのお隣も。

サッカーの興奮鎮める柚子湯かな　　忠彦

允章さん・・・普段は特にサッカーファンでもない私だが。今回は日本代表の大活躍もあり、又、アルゼンチン・フランスをはじめとする各国チームの素晴らしいプレーに大興奮し寝不足の夜が続いた。そんな時に入る柚子湯は将に身も心もゆったりとして気持ちを鎮めてくれるものだ。私も庭の柚子を浮かべ柚子湯に入った。

紀久男・・・季重なりかと思いますが捨て難い。

鳴り響く除夜の汽笛や神戸港　　とみ子

康敏さん・・・停泊船が一斉に鳴らす除夜の汽笛と共に海の香、冷たい北風、港の灯、新年への期待…など。様々なイメージが広がる。

参考「一斉に除夜の汽笛や横浜港」大熊庸介（濱）神戸港の方がイメージが膨らみますね。

息深く冬至南瓜を真っ二つ　　とみ子

五郎太さん・・南瓜は実に硬く、息を込めて切らねばなりません。「息深く」が効いています。

千恵さん・・・丸ごとの南瓜を半分に切るのはなかなか厄介な仕事です。きっと切れる包丁と気合と渾身の力で真っ二つにしたのですね。

◎手擦れなきホテルの聖書冬の雨　　康敏

孤舟さん・・・備え付けの聖書には目もくれず、入室直後テレビのスイッチを入れる客が多いのだ。

恵洲さん・・・誰も読む人のないホテルの部屋備え付けの聖書は新品同様なのですね。このような普段目がいかないものからでも俳句はできるという発見の好例。

棒グラフ幾山越さばマスクとる　　びん

ゆたかさん・・コロナは終息の気配もなく先が見えない状況が続きそうですね。

◎熊出づと言われ鈴ふる木曽路かな　　びん

孤舟さん・・・熊が人里に現れること多い。共存には「鈴」しか有効手段はないのか。

堂哉さん・・・北海道での経験を思いだしました。その時の鈴をいつまでもリュックに付けて街を歩いていました！

八重椿言ひたい事があるようで　　正明

恵洲さん・・・満開のツバキを見つめていたら何やらもの言いたげな風情を感じたという感性を買います。誰にでも作れる句ではありません。一重椿や山茶花などは、言いたいことはないの？などと茶々を入れてはいけません。

猫の道追ひて奥には花八つ手　　けい子

千恵さん・・・目の前の猫の行き先を追っているとその先に花八手が現れるという映像が目に浮かびました。

つい失くすマフラーそれぞれ曰くあり　　亜也

啓子さん・・・何やらクスッと笑いました。マフラーや手袋、あの時あそこで買った、誰そ

れに貰った、などちょっとした想い出があったりするものです。それは曰くというほどものではないかもしれません。読み手にちょっと引っかかるような面白い言葉を選ばれ、ユーモアが感じられます。

顔見世の最後の出番叶はずなり　紀久男

（深夜転んで怪我。救急車の世話に）

盛雄さん・・・怪我で救急車、辛い1日だったでしょう。

紀久男（自解）・28日千穐楽の前日義弟の葬儀でビールを何杯も飲み自宅でベッドに上がる時、膝の古傷を打って出血、血が止まらず救急車の世話になり、結果最後の出番を諦めざるを得ないことになりました。

弟と義弟逝き吾大怪我の厄払ひ　紀久男

盛雄さん・・・なぐさめる言葉が出ない。

鋤焼は家族の丸くなるところ　孤舟

堂哉さん・・・子供の頃、我が家の食卓は丸い形でした。たまの鋤焼きは身も心も丸くしてくれました。

穏やかな日々に慣れ行くラ・フランス　五郎太

くにおさん・・作者になにか大きな節目があったのだろうか。節目の変化にも漸く慣れて心穏やかな暮らしに入った老境の感慨を詠まれたものだろう。この句も秋の一句としていただいた。

中天に月煌々と冬の空　ただしげ

龍平さん・・・早朝公園散歩の我が友。今朝も北西の空に　毎朝位置を少しく変えて

百歳を待たずして逝く師走かな　ただしげ

隆さん・・・・人生は「望月の欠けたるところ」があるを良しとしたい。

失せ物のつひに出（いで）ざる寒さかな　恵洲

規雄さん・・・「あなたって、いつも何か探してるわね」と亡妻によく言われました。この句を読んで、その頃のことを懐かしく思い出しました。

聖樹立つコンビニに買ふ中華饅　康敏

啓子さん・・・クリスマス時期になると最近はコンビニにも賑やかなツリーが置かれる。そこにホカホカに蒸しあげてある中華饅を買いに来た作者。何でもない、でも微笑ましいような日常の生活の一コマが活写されていると感じました。

楽しみつつ句作に勤しみ年暮るる　ゆたか

康敏さん・・・年末に当り各会員の思いを代表して述べて呉れている。但し、中七が字余りなのでリズムが悪い。「句作に励み」では。

盛雄さん・・・心構えが素晴らしい。〝青葉会〟には良い仲間がいます。

サンタさん今も信じる園児達　國護

とみ子さん・・・園児たちの輝く瞳が、想像されます。

木枯らしの抜ける林に笛の鳴る　啓子

ただしげさん・虎落笛を伴って木枯らしが林を吹け抜ける寒々とした感じが伝わってくる。

三味方（しゃみ方）の掛声冴ゆる河東節　啓子

天牛さん・・・あのグループの中に入った者でなければ分からぬでしょうね。

啓子さん（自解）・河東節の舞台前のリハに立ち会わせて頂きました。唄い手はほぼ男性ですが、三味線は粋な女性ばかり。その牽引役（立三味線）の方の合いの

手、唄い始めの印となる掛け声が殊更にきりりと艶やかで、一瞬にして場の空気を変えるようでした。

紀久男・・・・12月26日千穐楽で、しかもNHKの収録日にも拘わらず大向うなし。立三味線の師匠（山彦千子：若い頃から人間国宝）の「ハオー！」の掛け声に乗り河東節を唄い始めます。実に好い掛け声でやる気にさせます。

粛々と抜歯の予約冬ざるる　　盛雄

昇さん・・・・先日、私も奥歯を抜きました。緊張感や不安感がよく伝わってきます。この気持ち痛いほど分かります。季語の斡旋が絶妙！

妹が兄を従がえ七五三　　けい子

亜也さん・・・晴着で落ち着かぬ兄とはしゃぐ妹。
天牛さん・・・女の子は成長が早く「ませて」いますからね

賀状書く準備に先は筆を買ふ　　天牛

亜也さん・・・そうでもしないと取り掛かる気がしない面倒さ。

顔見世やさゝま最中を家苞に　　紀久男

康敏さん・・・神田神保町の「さゝま」の最中と思うので、顔見世は南座ではなく歌舞伎座の十二月公演だろう。さゝまの松葉最中はわざわざ立ち寄って買う値打ちがある。東京で最も美味い最中だ。

一隅に洋野菜ある冬市場　　五郎太

※五郎太さん（自解）・・秋田市民市場の一隅では、アレッタ（ブロッコリー×ケール）、アイスプラント、サボイキャベツ（ちりめんキャベツ）、カリフラワー、カリフロオーレ（茎カリフラワー）、サラダ、セロリアック（根セロリ）、ラディッシュ、リーキ（ポロねぎ）、リーフレタスなどの名がついた洋野菜が売られていました。いずれも近くの農園産のようです。

暮れ早し京都南座初日開く　　ただしげ

紀久男・・・・仁左衛門、鴈治郎等の顔見世は京阪の冬の風物詩として、切符入手難です。大阪時代のことを思い出しました。

寒椿ひときは映える燃える紅（あか）　　國護

※孤舟さん・・・一句の中で口語と文語の混用は避けましょう。「ひときは」が文語なので、「映える」「燃える」は、「映ゆる」「燃ゆる」とすべき。

日に薄く不満げに見ゆ古暦　　亜也

孝岳さん・・・残り僅かに薄くなった暦は、今年もとうとう特別な成果が無かった残念な自分の気持ちを代弁しているようだ。「不満げな」が効いている。

§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§

【次回青葉会予定】　ご注意下さい！次回句会場は昨年10月に一度開催した五反田です！

令和五年一月二十六日(木)　時間：十三時～十七時
会場：品川区東五反田2丁目10の1「パークタワーグランスカイ」2F「コミュニティプラザ」
◇参加者は当季雑詠5句。投句は2句まで。投句締切：令和五年一月二十四日（火）中
　投句は今井宛FAX、或いは星田メール宛頂戴できれば句会清記に反映致します。
◇ご参加のご意向、投句は今井宛FAXか郵送、或いは星田メール宛お願い致します。

※ご参加をお考えの方で今回初めての方は五反田駅にてお待ち合わせを考えます。星田までご連絡下さいますよう。

【吉例　初芝居総見予定】

令和五年正月五日(木)新春浅草歌舞伎　第一部（十一時～）観劇　二等席（六千円）

出し物　「引窓」　出演：隼人・橋之助・新悟

「男女（めおと）道成寺」　出演：巳之助・新悟

《観劇後》新年会（午後二時半～）　場所：どぜう「飯田屋」　会費：六千円程度

■　■　■　■　■

青葉会報

一、今年最後の句会前日、またまた不覚、深夜ベッドに入ろうとした矢先転倒、出血が止まらず救急車で府中病院に。手当してそのまま午前四時に帰宅したものの、外出できる状況になく後を啓子さんに頼んだ次第でした。24 日㈯抜糸、28 日㈬完治しました。皆さまにはご心配ご迷惑をおかけし申し訳ありませんでした。深くお詫びいたします。

二、当日の句会は前述の事情から世話人の紀久男さんは欠席でしたが、納会の意味もあり、開始から30分、花伝亭長太楼（丸紅 OB 大滝長孝氏）さんをお招きして落語を愉しませていただいてからの句会となりました。久し振りのゆたかさんをはじめとして名古屋からけい子さんもご参加、出席者 11 名、投句 14 名、選句のみに、花伝亭さんにもお名前を「花」としてご参加いただきました。いつもの五郎太さんの披講でスムーズに進行、ご覧のように　けい子さん、啓子さん、孤舟さん、堂哉さん等が高得点でした。句会終了後、銀座アスター三茶店に移動しての納会となりました。納会には久々の恵洲さんもご出席、最後の締めに　ゆたかさんの詩吟も花を添え、和気藹々の内に青葉会一年の締め括りができました。

三、関係者近詠

長き夜を二度目の語らひ酔ひ醒めて　眞希子　　毎日を同じ嘆きの九月尽く　陽亮

新米と鹿肉友は生産者　仝　　先立ちしひとをまぶたに温め酒　仝

留守番は栗剥き夫は賃仕事　仝　　この秘密父母にも秘密墓洗ふ　仝

ちょんちょんと糸目切るごと松手入　弘子　　坂東太郎落ち行く鮎の浮き沈み　仝

こそばゆき水引の揺れ鼠骨句碑　仝　　歌垣の粧ひぼちぼち筑波山　仝

邯鄲や華甲も古稀も一里塚　仝　　河東節「助六」稽古

陵の径も賑やか小鳥来る　仝　　声張り上げ心地良きかな秋の汗　紀久男

秋深む復活唱ふる異国の葬　仝　　仁左衛門等の「一力茶屋の場」

病み上がり仁左の九月は絶好調　仝

あかんたれ夫婦でオペの秋彼岸　仝

――――――森の座　一月号　（横澤放川　選）

亡命の少女逞し冬薔薇　盛雄　　僻地での単身赴任蒲団干す　健介

二度寝して夢ひろいゆく時雨月　仝　　年暮るる実り少なき句作かな　仝

家族葬とふ遅き知らせや山眠る　仝　　対抗戦ちびっ子ラガーひたむきに　仝

しぐるるや知恩院への女坂　仝　　芝居はね元炭団屋の居酒屋に　紀久男

時雨るや茶店の相席嵐山　仝

胃もたれに「正露丸」呑む冬の朝　仝

（「征露丸」と称した時もあり）

――――――きさらぎ句会　11・12月号――――――

四、

孤舟選者近詠

白桃の柔肌に爪立てて剝く　啄木鳥はきのふの夢を敲きをり

案山子だと思へど急に笑ひだす　保線夫の泡立草に隠れけり

渓紅葉巨岩見上ぐる舟下り

令和四年　十二月　二十八日

紀久男　記